

## 主 題：ユダの頌栄①

## 聖書箇所：ユダの手紙 24節

ユダの手紙をお開きください。きょう私たちが学ぼうとしているこの手紙の最後24-25節は主なる神への頌栄で締めくくられています。頌栄、つまり神に栄光を帰すこと、神の栄光をほめたたえることです。確かに私たち人間は救われていようとそうでなかろうと、神の栄光を現すことを目的に生かされていることを私たちは知っています。あのウエストミンスターの大教理問答集の中にも、人間の第一の、最高の目的は神に栄光を帰し、永遠に神を限りなく喜びとすることである、そのために私たちは生きているのだと非常に見事に記されています。

では、なぜユダはこの最後のところに頌栄を記したのでしょうか？ただそのために生きているから、その理由でこの頌栄を最後に記しているのでしょうか？またこの手紙の読者たちに私たちは一体何のために生きているのか、その目的を思い起こさせるためにこのことを最後に記したのでしょうか？恐らくユダが頌栄を最後に記したのは、彼自身がこの目的に沿って生きていたからでしょう。なぜそんなことが言えるかという、まずこの手紙の文頭にそのことが記されています。1節にはクリスチアンの定義という教えが記されていました。クリスチアンとは神によって召された者であり、父なる神にあって愛され、イエス・キリストのために守られている者であると救われた者たちの詳細な説明が加えられていました。文頭からユダはこの救いのすばらしさを確かに知っていたということを私たちに示してくれています。また同時にユダがこの手紙を記そうとした当初の目的からも彼は喜びにあふれ、救いに感謝しながら生きていたことがわかります。3節には彼はもともと救いについて手紙を書こうとしたのだと記しています。ご存じのように、偽りの教師たちが入り込んできて偽りの教えをもって惑わしている教会の現状を知った時に、しっかり信仰に立って戦うことを勧める必要が生じ、それゆえにこの手紙の内容が変わったのだということが彼自身のことばによって記されています。

## ★ 救いについてのユダの教え

しかし、この手紙の中で救いについて記述がないわけではありません。手紙の文頭だけでなく、今私たちが見ようとしているこの手紙の末尾、このわずか2節の頌栄の中には救いについての教えが凝縮され、救いに関して余りにも大切なことが記されています。それゆえに私たちはきょう一日でそのすべての祝福を学び切ることができません。でもこうしたことから、ユダという信仰者は神が与えてくださったこの救いを確かに喜び、感謝していたことがわかります。救いで始まったこの手紙は救いでもって完結していると言うことができます。ですから彼は書かなければならないという義務感でこの頌栄を記したのではなく、救いを喜び、感謝を捧げる生活、つまり神の栄光をほめたたえる生活を普段から送っていたので、自然と神への称賛、神への頌栄というものが内側からこみ上げてきたのでしょう。恐らく彼と話をしていたら、彼の口から常に神への感謝、神をほめたたえる、そのようなことばがあふれ出てきたでしょう。だから彼は救われた感謝というものを表さずにはおれなかったのです。

これはユダだけではありません。救われたことを感謝している皆さんに共通していることだと言うことができます。救われていることを感謝している人というのは、黙っていてもそれが出てきます。もちろん人々に語らなくても自分の内側から神への感謝というのが当然あふれ出て来るはずです。あのパウロというひとりの信仰者を見た時に、まさにそのことを彼自身の生活からも知ることができます。ローマ1-11章にはすべて救いのことが書かれています。救われる資格のない、永遠の地獄こそがふさわしい我々罪人に神は途方もなく大きな犠牲を持って救いを備えてくださり、その救いへと私たちを招き入れてくださった、そのことが記されています。そしてこのすばらしい救いにあずかるためには行いではなくて、アブラハムがそうであったように、イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救いにあずかることを教えています。1-11章の終わりまで、彼はこの神のすばらしい救いと我々がその救いに全く値しない存在だということを明らかにし、11章の最後36節で「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」という頌栄をもって終わるのです。

その後12章になると、このような祝福にあずかった私たちがどう生きて行くのかを彼は具体的に記していきます。主によって救われたことを喜んで人はその感謝を何らかの形で示そうとすると。まさにその感謝が、主に対する愛が私たちの動機となって、神が喜ばれる歩みが生まれてくるのだと。パウロもそのように生きていた。ユダも同じように歩んでいたのです。恐らく信仰者の皆さんも同じことを望んでおられるはず。あなた自身もこの地上に置かれている間、イエス様にお会いするその時

で、主によって与えられたその救いの恵みを感謝しながら、何とか神の救いのみわざにこたえながら歩んで行きたいと。この方のすばらしさを証する歩みをもって、ひとりでも多くの人たちにこのすばらしい神を知ってもらいたいと。もしあなたがそのように願っておられるなら、ぜひこの頌栄と一緒に見ていきましょう。この頌栄によって、そのように歩んでおられる皆さんの歩みがますます励まされるでしょう。またもしそうでなかったのなら、あなたのうちにそのような歩みが始まることを期待します。

#### A. 主なる神がほめたたえられる二つの理由

ユダが記した神への頌栄、24-25節をごらんください。

:24 あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、

:25 すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

ユダはここに主なる神がほめたたえられる二つの理由を記しています。どうしてこの方がほめたたえられるのか。24節にあるのはそのみわざゆえにこのお方は称賛に値すると。二つ目25節にはこのお方ゆえに。どんな神なのかを知れば知るほど、まさにこの方のみが称賛に値するお方であると。ですから24節には称賛に値するみわざゆえに私たちはこの方を称えと。25節には称賛に値するお方ゆえにこの方をほめたたえとユダは記すのです。まず一緒にこの24節を見てまいりましょう。

#### 1. みわざのゆえに

##### 1) 救い

今お話ししたように称賛するみわざのゆえにユダはこの神をほめたたえようとするのです。どんな神のみわざをユダがほめたたえていたのかというと、言うまでもなくそれは救いです。ユダは24節において救いに関して神が私たち信仰者に対して行う、すると断言して下さった二つの約束を記しています。今からそれを見ていくのですが、みことばを通して私たちは神がどんなことをあなたのためになしてくださったのか、それを見る時に私たちがしっかりと学ぶべきことは、神というお方は真実なお方であり、つまり約束を絶対を守るお方であるということです。もう一つは神は約束されたことを成就するために十分な力を持っておられることを心から信じなければいけません。今言ったことは当たり前のことです。我々神によって造られたものは、神を正しく知ることが必要なのです。

我々をお造りになった、そして我々を救ってくださったまことの神は、ご自分が言われたことを絶対に曲げたりはしないということです。あんなことを言ったけれども、前言を撤回します、都合が悪くなったのでできません。そんなお方ではない。言われたことを絶対に実行されるお方です。真実な約束を守られるお方です。二つ目にどんなことでもおできになるのが私たちの神です。我々はそのことをしっかりと学び続けていくことが必要です。

##### (1) 救いは永遠に失われない

さて、一つ目にどんなみわざをなしてくださったのか、救いに関することです。一つ目にユダが言うことは「あなたがたを、つまづかないように守ることができ」ということです。まずここに出て来るのは「守る」という動詞です。「守る」のは言うまでもなく25節の初めに出てくる私たちの唯一の救い主である神です。神がこの約束をお与えになっている。誰を守るのかというと、ここには「あなたがたを」と書いてあります。このユダの手紙を受け取った受取人たちです。1節に「ユダから、父なる神にあって愛され、イエス・キリストのために守られている、召された方々へ。」とあります。つまり同じ救いにあずかっているクリスチャンたち、兄弟姉妹たちのことだということがわかります。では何から守ってくれるのかというと、24節には「つまづかないように守ることができ」と書いてあります。つまづきから守ってくれるということです。この「つまづかないように」という形容詞は「よろめかない」とか「転ぶことがない」という意味です。新約聖書のこの箇所にはしかこのことばは出てきません。これは健脚な馬がつまずいて転ばないように、しっかりと立ち続けることができるさまを表すことばです。それから我々もつまずいたり転んでしまうことがないようにしっかりと立ち続けている様子を表すことばです。2テサロニケ3:3にも「主は真実な方ですから、あなたがたを強くし、悪い者から守ってくださいます。」とあります。神はつまづきからあなたを守ると言われているのです。では私たちのつまづきというのは一体何のことなのか——。もっと知りたいし、知らなければいけないのです。

これを罪からの守りであると言う人たちがいます。なぜそう言うかということ、新共同訳という聖書の24節の初めの部分は「あなたがたを罪に陥らないように守り、」と書いてあります。私たちは果たしてユダはここで救いの恵みにあずかったクリスチャンたちが罪に陥ること、つまり罪の誘惑に負けて罪を犯してしまうことがないように守ってくださるということを教えているのかどうかを考えなければいけません。それがこの聖書でユダが教えようとしたことかどうかです。もしそうだとしたら、いろいろな疑問が出てきます。現実問題として我々は毎日の生活でさまざまな罪を犯し続けています。悲しいこと

に我々の意に反して、私たちは日々の生活で罪との葛藤、また罪への敗北を繰り返し経験しています。私は本当に惨めな人間ですと告白したパウロは、神様、あなたは罪に陥らないように守ると約束してくださいのに、なぜそれが実現しないのですかと不満を口にしていません。かえってパウロは私たちの主イエス・キリストのゆえにただ神に感謝しますと、神への感謝を表しています。もし神の約束があなたや私が罪に陥らないように守ってくださるとのことだとしたら、現実を見た時に、余りにも違い過ぎて悲しくなります。罪に陥ることから守ってくださると言っているが、なぜ私はこんなに罪に陥ってばかりするのでしょうか。

その理由は、ここに書かれているつまずきから守るというのは、罪を犯さないように守ってくださるといふ約束ではないからです。確かに我々が神の武具を身につけて神の助けを仰ぎながら歩み続ける時に、罪に対する勝利を数多く経験することができます。しかし、この地上において罪を犯すことが全くなくなった、そういう人はイエス様を除いてどこにもいなかったし、今もないし、これからも現れてきません。私たちが罪から完全に解放されるのは、栄光のからだをいただいて主にお会いした時です。

ですから、このつまずきから守るといふのは罪からの守りではなく、ここで教えられていることはあなた方を背教から守るといふことです。意味を正確に知るためにまず背教の定義をしましょう。背教とはかつて信じていた教えから故意に熟慮した上で離反することです。かつて自分が信じていると思っていた教えから、よく考えた上でみずからの意思をもって離れる、全く違うものを信じるということです。例えば誰もがクリスチャンだと疑わなかった人が全く違う宗教を信じてしまう、それを背教と言います。

さて、その意味を知った上で、どうしてこれが背教からの守りだと言えるのか、その理由を説明します。まず一つは文脈です。24節の初めに「あなたがたを、つまずかないように守ることができる」と書いてあり、その後「傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方」とあります。後半に罪からの完全な解放が書かれています。我々が神の前に立つ時です。罪を持ったまま私たちはそこに立つわけではありません。完全に罪から解放された者として、完全な勝利を得た者として我々は神の前に立つのです。ですからもしこの24節の初めが罪に陥らないことへの守りであるとすれば、同じことを繰り返していることとなります。そのことから24節の初めで言っていることは、罪からの守りではないと言えます。

もう一つ背教だと言える理由は2ペテロとの関連からです。私たちがこのユダの手紙を学び始めた時に、25節のユダの手紙中19節が2ペテロと関連しているということを見てきました。2ペテロが記された後ユダが記され、2ペテロが警告していたことがまさに今現実の問題として起こっていると、こういった関係でした。2ペテロ2:20-22に、ある人々のことが記されています。「主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったです。彼らに起こったことは、『犬は自分の吐いた物に戻る。』とか、『豚は身を洗って、またどろの中に入ることになる。』とかいふ、ことわざどおりです。」と。詳細はこの箇所をもう一度ネットで見ていただくと、どういふことを学んだのかを思い出していただければと思います。

今皆さんと一緒に見たいのは、20節の初めのところです。「主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服される」人たちというのは、まさに今我々が見ている背教者たち、にせ信者のことです。なぜそう言い切れるのかというと、「主であり救い主であるイエス・キリストを知る」と書いてあります。これを見ると、「知る」ということばがあるから彼らもイエス様を信じているのではないかと言う人があるでしょう。しかし、ここで使われている「知る」といふのは「神を個人的に知る」、「神と個人的な関係に至る」という意味での「知る」ではないのです。この「知る」といふのは「正確で詳細な知識」という意味です。つまり知的に主のことを知っていたと書かれてあるのです。イエス様がどういう方なのか、神がどんな方なのか、その知識を持っていたのです。しかし、残念ながら彼らにとってイエス様は自分自身の主でもないし、自分自身の救い主でもなかったということです。悲しい現実は、そういう知識だけを蓄えている人たちはいっぱいいるということです。ここに記されているのはまさにそういう人々の話です。

20節を見て、この人たちは救われていたと言う人たちは「見てごらんない、イエスを知ることによって世の汚れから彼らは逃れたではないですか」と言うかも知れません。確かにこの「のがれ」といふことばは脱出する、また「世の汚れ」といふのは世の中の不潔や墮落という意味です。確かにこれだけ見たら救われているかのように思えるのですが、ここには「世の汚れからのがれ」と書いてありますが、罪からのがれたとか罪のさばきからのがれたとは書かれていないのです。そこが問題なのです。確かに聖書の教えを聞いた人が、それを実践しようと努力することによって、何らかの変化が生活にもた

らされる可能性はあります。例えばみことばを聞いて、「そうか、もう少し優しくなろう」と決心する人もいます。ある人は「もう少しことばに注意しよう」、そのような決心をするかもしれない。でもこのような決心は自分の努力によるもので、主によって心が変わられたからそのように生きていこうとするのとは全く異なることです。みことばを聞いて、「いい話を聞いたわ、ではそのような教えを実践しよう」と努力してみても、必ずもうできない、無理だと、実践に限界を覚えてもとの生活に戻ってしまうのです。確かに聖書に関心があったかもしれない。そして学んだ聖書の教えを一生懸命自分で努力して実践してみたら、一時的には何か変化があるかもしれない。でもそれは長続きしないのです。なぜかという、その変化は心から起こったものではないからです。

イエス様はそんなことをお話になりました。四つの種まきの中で岩地に蒔かれた人たち、いばらの中に蒔かれた者たちです。岩地に種が蒔かれた、どんな人たちだったかをイエス様が説明します。マタイ 13:20には「みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです」と書いてあります。聖書のことばを聞いて彼は喜んでそれを受け入れるのです。21節にこう続きます。「しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」、何もなければいいのです。でも信仰ゆえにいろいろな問題に遭遇した時に、そこから離れてしまう。最初からみことばを拒否したのではない。歓迎しながら実は心が神によって捉えられていない。その人にうちに根が張っていないから実を結ぶことがないのです。いばらの中に蒔かれた種は22節に「みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしがみことばをふさぐため、実を結ばない人」だとあります。聖書の話聞くのは大好きかもしれない。いいことがいっぱい書いてあると言うかもしれない。でもこの人の関心はこの世なのです。常に目がこの世のことに行ってしまう。どちらを取るかというと神ではなく世を取るのです。道端に蒔かれる人もそうですが、この3人に共通していることは誰ひとりとして実を結ばないということです。その人が根本的に変わってこないのです。主イエス・キリストによって救われた、新しく生まれ変わったことがその人の歩みをもって明らかに示されないのです。

このユダの手紙と2ペテロの非常に関連しているところ、ペテロはあざける者たちが現れますよと警告していました。ユダはもうその人たちが現れていますと、このように記していました。ひょっとすると、2ペテロに記されていた背教者たち、にせ信者たちがもう既にユダの手紙の読者たちの中に存在していたのかもしれない。我々ももし信仰の仲間としてともに労してきた人たちがその信仰を捨てて、入り込んできたにせ教師たちの教えを信じるようになったとしたら、神学用語ですけれども、救いの永遠堅持という教えについて疑問を抱くでしょう。救いの永遠堅持というのは、救われた人は永遠に救いを失わないということです。ある人たちが教えるように、イエス様を信じて本当に救われていても、その救いを失ってしまうという教えではない。本当に救われた人はその救いを絶対に永遠に失わないという教理に対して疑問を抱いてしまうでしょう。なぜなら救われていると思っていたのに、全く違う教えに走って行ってしまふ。そういうことがひょっとしたら起こっていたのかもしれない。

そこで、ユダは神が守ってくださるから、本当のクリスチャンたちが背教者になることはあり得ないということをお話して教えるようにここに記しているのかもしれませんが。この24節でユダが教えていることは、主がほめたたえられる救いに関する一つの約束として、神によって救われた人はその救いを何があっても永遠に失わないということです。主イエス・キリストの救いにあずかっておられるクリスチャンの皆さんはその約束に立つことです。

## ◎ 救いに関すること

救いにあずかったクリスチャンがその救いを失うことがあるのですかとだれかから問われた時に、皆さんはどうお答えになりますか？いや、そんなことは絶対にないと牧師が言っていましたよとか、そんな話を聞きましたよとか言う信仰者であってはならないのです。もう何度も私たちが学んできているように、我々が信仰者としてこの地上を生きていくために必要なのは、神がこう言っているから私は信じています、このように聖書が教えているから、その約束に立っているのですとはっきりと話せることです。そのために我々はしっかりと神が何を言われているかを見なければいけない。今からこの時間、救いという余りにも大切なことなので、それを一緒に見て行きます。

### ① 救いは神からの賜物

一つ目は救いは神からの賜物だということです。これはもうだれしもが知っていることです。つまり救いというのは自分の努力によって得られるものではないということです。どんなに頑張っても、どんなに心を入れ替えてもどんなにまじめに生きますという決心をしたとしても、あなたの努力によって救いを得ることは100%あり得ない、不可能だということです。救いは神の恵みなのです。神の賜物です。そのことを教えている聖書の箇所があります。エペソ2:8「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」と。これが私が信じて

いることです、そこに立つのです。なぜならこう神が約束されたからです。行いによるのではないのです。救いというのは神から与えられるもの、神からの賜物です。2テサロニケ2：16には「私たちの父なる神である方、すなわち、私たちを愛し、恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方」がと書いてあります。神が一体何をしてくださったのか、そのことが書かれています。我々を愛してくださり、恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みを与えてくださった。罪赦された私たちは神とともに永遠を生きるのだという希望を持っています。この希望は、この救いは神が与えてくださったと。私たちの努力の結果、得たのではないのです。1ヨハネ5：20では、「神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださった」と。主イエス・キリストがこの世にお見えになって真実な方、神を知る理解力を私たちに下さったのです。だから信じたのです。そして最後にピリピ3：9には「律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」とあります。パウロが教えたことは律法を守ることによって義とされるのではない。それは自分が一生懸命律法を守ることによってではなくて、キリストを信じる信仰によって与えられるものだ。つまり救いにあずかる、きよい者とされる、正しい者とされるということです。すなわち「信仰に基づいて、神から与えられる義」と書いてあります。救いというのは私たちが努力して得るものではない、神からの賜物です。

## ② 救いは神のみわざ

二つ目に救いに関して教えられていることは、救いというのは神のみわざだということです。つまりあなたがこの救いにあずかるために、すべてのことは神がしてくださったということです。ヨハネ16：7にあなたを救うために神様がどんな働きをなしてくださったのかが書かれています。イエス様が助け主、つまり聖霊なる神様の話をしています。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところ遣わします。」と。ヨハネ14：16にも父なる神様が「ひとりの助け主をあなたがたにお与えに」と。「その方は、真理の御霊で」と14：17が教えます。ですからこの16：17も聖霊なる神様の話です。

さて、その聖霊なる神様の働きです。16：8を見ると「その方が来ると」とあります。聖霊なる神様が来ると、まず「罪について、……世にその誤りを認めさせます。」と書いてあります。つまり聖霊なる神様があなたの心に働いて、あなたに罪があること、あなたが神に逆らっていて、永遠のさばきに服する存在であるということを明らかにしてくださるのです。この働きは神の働きだと聖書は教えます。イエス様の福音をある人は何回も聞いた。メッセージが変わったのではないのです。あなたの心が変わったのです。同じメッセージを聞いていてもある時にそのメッセージがあなたの心の壁を打ち破って、あなたが本当にどれほど罪深い存在であるかを悟ることができた。自分には救いが必要だということを悟らせてもらった。それはあなたのIQが高いからではないのです。聖霊が働いたからです。そのように聖書が我々に教えてくれます。聖霊なる神様の働きというのは「罪について、……世に（つまりあなたたちに）その誤りを認めさせます。」、私は神に対して大変大きな罪を犯して来たと。永遠の地獄に至る罪を私は犯し続けてきた。そのことを悟らせてくれるのは聖霊だ。

聖霊なる神様が悟らせるのはそれだけではない。「義について、さばきについて」神様の真理を悟らせてくれるのです。私たちは人々に伝道する時に、人間的ないろいろな知恵を用いるかもしれない。でも人間的な知恵によっては、言っていることをある程度理解させることができたとしても、この真理を心から納得させたり、確信させたりすることは残念ながら私たちにはできません。それがおできになるのはただひとり神様しかいないのです。そしてこの聖書の箇所は私たちに罪を示し、自分はさばきに服する運命であることを示し、自分には救いが必要であることを示し、自分はどんなに努力をしても自分で自分を救えない存在であることを示し、イエス・キリストが成し遂げてくださった完全な贖いこそが私を完全に罪から救ってくださることを悟り、そしてその救いへと導かれていく。その救いを喜んで受け入れようとする、このすべての働きを神がしてくださると教えています。真実を明らかにするという働きは神の働きです。同時に真実が示された時に、私たちの心の中で神は働いて私たちが「神様、赦してください、私はあなたの前に大変大きな罪を犯してきた」と、その罪を捨てて、神に従っていこうとする。つまり悔い改めというのも実は神のみわざであると聖書は教えています。

ユダヤ人だけではなくて異邦人が救いにあずかりました。それを聞いた時に最初ユダヤ人たちは受け入れることができなかつた。でも証を聞いているうちに彼らはある確信に到達するのです。使徒11：18で「人々はこれを聞いて沈黙し、『それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。』と言って、神をほめたたえた。」と書いています。パウロでもペテロでもヨハネでもヤコブでもない、神が与えたのです。だからあなたが悔い改めてイエス様を信じようとした。それは神があなたのうちに働いてくださったからです。真実を明らかにし、真実を悟るように神が働き、悔い改めへと神が私

たちを導いてくださり、そして信じる信仰へと導いてくださるのです。ピリピ1：29には「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。」とあります。神様から与えられたものの話をするのです。神様が何を与えてくれたのか——。確かに信仰によって私たちはいろいろな苦しみも経験します。それも神からの賜物だ、ギフトだと。パウロはキリストを信じる信仰も実は神からのギフトだと言います。だからあなたがとても頭がいいからイエス様を信じたのではない。神が働いてくださったから、神ご自身があなたをこの救いへと導いてくださったのです。

同じヨハネ6：44「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。」とあります。つまり救いは、神が働いてくださらなければ実現しない。救いというのは100%神のみわざだと教えるのです。真実をあなたに悟らせること、罪から悔い改めること、イエス・キリストを信じる信仰もすべて神がなしてくださったみわざです。救いは神のみわざである以上、人間の巧みなことばや策略によって救いにあずかることは絶対はないということです。どんなに私たちがうまく語っても、いろいろな試みをしたとしても、我々人間には罪人を救いに導くこと、罪人を救うことは不可能だと。それができるのは神様しかおられないのです。

よくこんなメッセージを聞きます。例えば救われるのとさばかれること、それを対比させるのです。天国と地獄どっちがいい？と。聞いている者たちにどっちが徳であってどっちが損であるかを考えさせて信仰の決心を迫るような伝道をお聞きになったことがあるかもしれない。でもこれは聖書が教える福音宣教の教えとは全く相反するものです。そのことは明らかです。今我々が見て来たように、そんなメッセージは聖書の中に記されていないのです。ですから、あなたにとってどっちが徳なのか損なのかによって促される決心というのは救いをもたらすものではないと言えます。なぜかという、それはあくまで自分本位の選択だからです。これは主がお語りになった「狭い門からはいりなさい。」(マタイ7：13)という招きとは根本的に異なるものです。イエス様が言われたのは「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多い」と。「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれ」(14節)だと。何とかして罪人を救おうとして、信じやすいようなメッセージを語るというのは、まさに広い門から入ることを命じる信仰です。それは悲しいことに聖書が教えているメッセージではないということです。

私たちが覚えなければいけないのは、罪人に主が問うておられることは、主から何をいただくかではなく、主の前に何を捨てるかです。イエス様はルカ14：26で「『わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。』」と言われました。あなたにとってそれがどんなに大切なものであったとしても、私のためにそれを捨てることができるのか、そのことが問われているのです。捨てたら救いますではないのです。問われていることはあなたの最も愛するものよりも私を愛するかと問われたのです。あなたの愛する家族よりも、そしてあなた自身よりも神を第一に愛するのかと問われているのです。自分にとって何が徳なのかを考えて選択するのではなく、神が教えておられる真理を知り、神の前に正しい選択をすることが救いをもたらす信仰です。まさにそれこそがみことばの教える狭い門を語ることになるのです。ですから私たちは神が語れというメッセージを語るのです。結果は心配しなくていいのです。私たちは神が語れというメッセージを神の助けをいただきながら語るのです。愛を持って、忍耐を持って。

### ③ 救いは永遠のいのちをもたらす

三つ目に私たちが覚えることは救いは永遠の命をもたらすものだということです。主イエス・キリストを信じた者に約束されているのは、永遠の救いです。ヨハネ5：24でイエス様は「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」と言われます。信じた者は永遠の命を持ち、さばきに会うことがないと。なぜイエス様はこんなふうに言われたのでしょうか。私を信じる者は永遠のいのちを持ってさばきに会うことがないと。さばきに会うことがないのはいただいた永遠のいのちを失うことがないからです。もしいただいた永遠のいのちを何かによって失ってしまうのなら、また救われなければいけない。またそれを失ってしまうのだったらまた救われなければいけない。信じている時に、救われている時に召されたらいいですが、救いを失った時に召されてしまったら、その人は永遠の地獄に行ってしまう。そんなことを恐れる必要はないと。なぜなら神が与えてくださる救いというのは永遠のものです。永遠のいのちゆえにあなたが永遠のさばきに会うことはないと言います。

同じことをヨハネ10：28でもイエス様が言われています。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」と。どうして永遠のいのちを得た者が決して滅びることがないのか——。それは与えられた救いを失うことが絶対はないからです。「だれもわたし(イエス様)の手から彼ら(救われた者たち)を奪い去る」こ

とがないと。イエス様の手からイエス様が救った者たちを奪い取っていく存在はいない。その理由はヨハネ10：30でイエス様が言われています。「わたしと父とは一つです。」と。何を言ったのかというと、主イエス・キリストは神だから神に勝る存在がないゆえに、神の力に勝る力を持っている存在がないゆえに、神が守っておられる人たちをだれもそこから引き離すことができないと。ですからこうして全能の主が与え、主が守ってくださっているゆえに救いは永遠のものであり、この救いを失うことは絶対にないと。

もう一つ神が与えてくださった救いを絶対に失うことがない理由は、この主が祈ってくださっているからです。ヘブル7：25に驚くべき真理が記されています。「したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。」と、イエス様はイエス様を信じる者たちを完全に救うことができますと。その後「キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」と。イエス様が亡くなってしまったり、イエス様がどこかに行ってしまうことはないのです。永遠に生きておられる方がいつも救いにあずかったあなたのために祈ってくれていると。だからあなたの救いは永遠に保証されているのです。それが神のことばが教える真理です。

きょう私たちが見てきたことは、神がお救いくださったクリスチャンたちはその信仰を捨てて背教者となることは絶対にないのです。なぜなら神がつまずくことがないように守っていてくれるのです。その信仰を捨ててどこかに行くようなことがないようにしっかり守ってくれているのです。きょうのテキストが我々に言ったのは、神が「あなたがたを、つまずかないように守ることができ」ということです。このように言われているのは神ご自身です。可能なのだということを強調するのです。ある人は言うかもしれない。でも、信仰を持って神に仕え、そしてある時から全く神からも教会からも離れ、世の人たちと同じような生活をしている人たちがいるではないですかと。彼らは背教者ではないのですか——。聖書は恐らく彼らは救いにあずかっていなかった人たちであると言います。救われている人々のように、クリスチャンのように見える未信者もたくさんいるからです。

きょう見て来たように救いは神のわざです。そして神が救ってくださったあなたは、救われていることがわかります。なぜならこのように救いに導いてくださった神があなたのうちにいてくれるのです。あなた自身に、あなたは私のものだ。私があなたを贖ったのだ。そのことをあなたにしっかりと悟らせてくださる。だから我々ひとりひとは自分の心をしっかりと吟味することです。この救いにあずかっているのかどうか。クリスチャンを演じているのかどうか。あなたが救いにあずかっているのだったら、あなたの救いは永遠に保証されています。そしてあなたはこの神の約束をしっかりと信じることです。なぜなら神は真実な方であり、神はどんなことでもおできになる全能の方だから。それを信じてそのように生きなさいと。そのように歩んで行きましょう。確信と喜びを持って。